

『学会見聞記』

第55回米国核医学会に参加して
55th SNM Annual Meeting

萱野大樹

金沢大学大学院医学系研究科

医薬保健学域医学類がん医科学専攻

バイオトレーサ診療学

博士課程4年

2008年6月14日から18日にかけて、アメリカルイジアナ州ニューオーリンズで開催された第55回米国核医学会に参加しました。米国核医学会は世界で最も規模の大きい核医学会で、今回も世界中の核医学に関する仕事・研究を行っている多数の研究者が参加しました。

6月13日、アトランタを経由してニューオーリンズに到着。この日の最高気温は32度、湿度も非常に高く、景色は全く違うものの、一足早く金沢の蒸し暑い夏を体験した心地でした。ニューオーリンズといえば、なんといってもジャズで有名な街ですが、一躍ニューオーリンズが有名になった(なってしまった)のは、2005年8月の大型ハリケーン、カトリーナの襲来です。米国史上最悪の自然災害であるカトリーナは、ルイジアナ州だけで1577人もの尊い命を奪いました。現在でも、郊外に少し目を向けるとカトリーナの爪跡がいたるところに残っており、被害の凄まじさを実感しました。3年近く経った現在、ようやくニューオーリンズの人口はカトリーナ襲来前の80%程まで回復しているとのことでした。学会会場のあるリバーサイド地区と中心街であるフレンチクウォーターでは徐々に賑やかさを取り戻しつつあるようで、世界一有名な飲み屋街と言われているバーボン通りは夜遅くまで至るところからジャズやブルースの生演奏が聞こえ、アメリカとは思えない不思議でエキゾチックな文化に惹きつけられた観光客で、非常ににぎやかでした。

今回会場となったコンベンションセンターは非常に大きな施設で、特に機器展示場とポスター会場の広さに圧倒されました。核医学分野で現在最も熱い視線が注がれている分子イメージングのセッションであるMolecular Imaging Center of Excellenceでは、広い会場にも関わらず満席で立ち見の人であふれ、世界中の核医学研究者の興味が非常に高いことを実感しました。このセッションの中で特に印象に残った報告は、bifunctional imaging物質の開発、すなわちPETとMRIのような異なったモダリティによる機能画像を同時に画像化することができるナノ粒子プローブの開発についての報告です。現在のPET/CTやPET/MRIではPETで機能情報を、CT・MRIで形態情報を画像化していますが、このナノ粒子プローブが実用化されれば、一回の検査で形態情報と2種類の機能情報を得ることができるといった画期的な開発に関する研究です。Cardiotoxicity of Cancer Chemotherapyのセッションでは、化学療法の進歩に伴い生命予後が改善する反面、治療に伴う副作用が問題となっており、この副作用をいち早く発見することの重要性について論議が交わされ、現在研究中のテーマである、「心筋血流製剤を用いた

化学療法による心筋障害の早期発見」への大きな参考となりました。また、Management of Thyroid CancerのセッションではSPECT/CTについての発表がさかんでした。SPECT/CTを用いることによって、元来核医学検査が不得手としていた形態情報を同時に得ることができ、より小さな病変の早期発見や部位の特定が可能となり、今年の4月から当科でも稼働を始めているSPECT/CTの有用性が示されていました。また、核医学が得意とする全身転移病変に対する新しい内照射療法についての発表もさかんで、Lu-177標識モノクローナル抗体を用いた腎細胞癌の治療、I-131標識Iodometomidateを用いた副腎皮質癌の治療、ソマトスタチンレセプターであるY-90標識DOTATOCを用いた神経内分泌腫瘍の治療など、様々な報告がありました。PET・SPECTを中心とした診断だけでなく、治療についても核医学分野の将来の大きな可能性を感じることができました。

今回、米国核医学会に参加して、世界中から集まった核医学研究者の最先端の研究内容に触れることができ、今後の臨床、研究に非常に大きなヒントを得ることができました。来年はトロントで開催される予定ですが、発表できるよう日々研究を重ねております。

